次回はアジアでの開催が見込まれ，（おそらく）マレーシアで２年後だという．詳細は決定次第，NTA のウェブサイト（https://ntaccounts.org/web/nta/show）を参照されたい．

その他，フランス・パリの様子を述べる．シャルル・ド・ゴール国際空港からパリ市内への移動には鉄道（RER B 線）を用いたが，窓ガラスやエスカレーターに落書きが残る等，（パリ基準では大したことないのだろうが）治安の悪さを感じた．また，パリ市内は地下鉄が縦横無尽に張り巡らされているが，ほとんどの駅にエスカレーターやエレベーターは無く，ベビーカー等の移動は大変と思われる．一方，そうした大荷物を持つ人を助けようと声がけが行われている様子も目にした．フランスは TFR が先進国の中で高いことで知られるが，街の設備面よりもこうした雰囲気が寄与しているのかもしれない．

上記の一方，ナポレオン３世が改造した近代パリの街並みはそれだけで歴史的な雰囲気を感じ，歩いていてとても楽しい街であった（名物であろう犬の「落とし物」に気を付ける必要はあるものの）．

（鈴木貴士　記）

フランス国立人口研究所 Elizabeth Wilkins 氏の社人研における研究滞在

令和５年２月20日～３月20日にかけて，フランス国立人口研究所・博士後期課程在籍のエリザベス・ウィルキンス（Elizabeth Wilkins）氏を招聘し，当所にて企画部・福田室長（筆者）との共同研究を実施した．ウィルキンス氏は，博士課程において「世代とジェンダー調査（Generations and Gender Survey：GGS）」のデータを用いて，祖父母による育児支援と成人子の出生力について，ヨーロッパとアジアにおける国際比較分析を行っている．昨年，４～７月に筆者がスペイン・バルセロナ自治大学に研究滞在した際に面識を得て，今回の共同研究へと至った次第である．

ウィルキンス氏の招聘は，筆者が代表を務める日本学術振興会科研費プロジェクト「両性出生モデルを用いた学歴ペア別出生力の分析：センサスデータによる大規模国際比較」（令和元～５年度）に基づき行われた．滞在中，ウィルキンス氏は，上記科研費プロジェクトのデータ分析補助作業，関連する出生論文の共同執筆，そして「全国家庭動向調査」を用いた「祖父母による育児支援と成人子の出生力」についての分析的検討を行った．４週間と短期間ではあったものの，対面で議論しながら集中的に各作業に取り組むことができ，概ね期待する成果を得ることができた．また，同氏による研究会での報告やランチ会等を通じて，所内の研究員らとの交流を図ることができたことも収穫であった．

コロナパンデミックによる渡航制限がほぼ撤廃され，学会や共同研究においても対面による研究交流が再開されつつある．一方で昨今の世界的なインフレと円安により，日本から海外に出て共同研究を行うことのコストがかつてないほどに上昇している．研究者が海外に出て視野を広げることは重要であるが，海外研究者を日本に招聘することにより国際的な共同研究を実施することのメリットも相対的に高まりつつある．今回の招聘により，当所における海外研究者の受け入れスキームを事務方と整理できたことは有益であった．今後は海外に出るばかりではなく，招聘による国際共同研究も視野に入れつつ，研究を進めるのも一案ではないか．

（福田節也　記）

第41回日本国際保健医療学会西日本地方会

2023年３月４日（土），長崎大学坂本キャンパスにて第41回日本国際保健医療学会西日本地方会がハイブリッド形式で開催された．基調講演はケニアで障害児施設「シロアムの里」を運営している公